

十住心論(密教入門)

第一住心 異生羶羊心	食べたい、飲みたいなどの動物としての生存欲を追い求める最低レベルの精神の段階。本能のままの状態。煩惱そのもの。人間としての、金持ちになりたい、出世したい、有名になりたい、人から尊敬されたい。という欲も全て獣としての欲に類する。	
第二住心 愚童持斎心	動物としてただ本能的な欲望に使役されている状態を脱し、理性を持ち、事象を背後から客観的に観ることができるようになった精神の段階。科学的な思考はここから生じる。	
第三住心 嬰童無畏心	世界の有様を見つめて、その背後に意味を見出す精神の段階。哲学的・宗教的な叡智を知る。	
第四住心 唯蘊無我心	初めて仏教の智慧に接した精神の段階。世俗を離れ、出家者となって、煩惱を静めて清い精神で世界を観る。その結果、世界は現象に過ぎず、世界の中で自己は存在しないこと(無我)を悟る。即ち観察される一切のものから執着を離れて、中道に徹する。	
第五住心 抜業因種心	世界の事象には全て因縁が働いていることを知る。世界のあらゆる事象には原因があり、その結果がまた原因となってあらたな状態が生じる。この因果の関係が永遠に続く。それが即ち、世界は無常であることを悟り、それに見合った生き方を選択できる精神の段階。	
第六住心 他縁大乘心	世界の全ての存在は他者との関係、即ち縁起によって成り立っている。つまり作用し作用される関係にあり、第一原因などというものは存在しない。その縁起を知った上で、己の生き方を選択する精神の段階。	
第七住心 覺心不生心	この縁起によって成り立っている世界の一切は空であることを知る。即ち世界のあらゆる存在には、実体も主体性もない。世界には意味も目的も方向性もない。ただあるようにあるだけである。それが法であることを悟った上で、己の生き方を選択する精神の段階。空もまた空である。空も仮と見なす。ただしあくまでも空である。その対立する空と仮を合一させて、“中”となる。(この思想を三諦という)以上がこの世界の真理を正しく認識可能な小乗仏教最高の境地。	
第八住心 一道無為心	法華・天台の思想(二乗作仏、一念三千)で、全ての衆生は仏性(仏の性質)を有し、それによって衆生の救済が可能になることを悟り、利他と慈悲に努める精神の段階。 また法は無始永遠(世界が存在する限りの不変)であり、その法によって生まれる仏陀の働きも永遠であることを悟る。	
第九住心 極無自性心	世界のあらゆる存在は関連性を持ち、且つ仏である(仏性を有することから、すべては平等(対等)であり、互いに慈悲を施し合う関係であることを知った境地。(縁起によってすべては関係をもち、対等とみなされる) 一切の争いを否定した状態を悟った精神の段階。	
第十住心 秘密莊嚴心	あらゆる存在の価値を認め、世界の一切を肯定(現在のあるがままの姿が尊い)して、現実を超越した絶対的な境地。無上の充足を得た精神の段階。(世界は空であるから、無即ち涅槃に至る) ただし、この絶対的な境地には生きている間は(仏陀であっても)達成できない。あくまで観想するのみである。密教でいう曼荼羅や印相、あるいは真言(呪文)は、思想上、あるいは精神衛生上の方に過ぎないことを知るべきである。	